

## 第2部

「家庭」・「学校」・「地域」に向けた提言



# 第1章 家庭で求められる取組—子育てのパラダイム

国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官 岩崎 久美子

[本章のポイント]

- 幼少期の自然体験や友だちとの遊びは、人生の貴重な財産であり、豊かな生活や満足感などを含む、広い意味での「人生の成功」に関わるものである。
- 自然体験や友だちとの遊びから獲得されるものの代表的なものは、総合的「知」、心の土台、家庭外のサポート・ネットワークである。
- 自然体験や友だちとの遊びの減少に対し、自然体験の量と現在の収入に相関があることから、社会的公平を目指した施策の充実や、平等性を勘案した体験活動の公的提供が一層考慮される必要がある。

## 1. 幼少期の自然体験や友だちは人生の貴重な財産

今回の調査を通じ、強調されるべきことは、幼少期の自然体験や友だちは、総じて、人生の貴重な財産ということである。この結論を得るにあたり、まず「何のために子どもには体験が必要なのか」、という根本的な問いを考えてみたい。

人生の基礎となる重要な能力を特定する作業を行っているOECD（経済協力開発機構）のDeSeCo（コンピテンシーの定義と選択：Definition and Selection of Competencies）プロジェクトは、なぜ、子どもたちを教育し、資質・能力を身につけさせなければならないのかという問いに対して、個人の要望としての「人生の成功」と、社会の要請としての「正常に機能する社会」の大きな2つの回答を想定する。特に前者の「人生の成功」とは、主観的な幸福感、あるいは、クオリティ・オブ・ライフという言葉に代表されるような、豊かな生活の質や満足感を意味する。この点で注目すべきことは、DeSeCoによる「人生の成功」とは、経済的地位や経済資源、いわゆる地位や富にのみにあるわけではなく、友だちや家族との社会的ネットワーク、余暇や文化活動、個人的満足感といった要素も含んで考えられているということである（ライチェンら2006）。

表1 人生の成功の要因

	分類	具体例
1	経済的地位と経済資源	有給雇用 収入と財産
2	政治的権利と政治力	政治的決定への参画 利益集団への加入
3	知的資源	学校教育へ参加 学習基盤の利用可能性
4	住居と社会基盤	良質の住居 居住環境の社会基盤
5	健康状態と安全	健康・安全性の確保
6	社会的ネットワーク	家族と友人・親戚と知人
7	余暇と文化活動	余暇活動への参加 文化活動への参加
8	個人的満足感と価値志向	個人的満足感 価値志向における自律性

(ライチェンら 2006:137-143)

小さい頃の体験が、ここで規定する「人生の成功」にどのような寄与するかについての回答は単純ではない。しかし、子どもの頃の良き体験は、長い人生の中で醸成し、一定年齢を越えたときに、懐かしい思い出や人生の知恵として、それぞれの人生に豊かさをもたらすものであることは間違いない。

たとえば、20年以上外国で生活する50歳以上の日本人に対して、日本人としてのアイデンティティを聞いた調査(岩崎 2007)を見れば、彼らが生き生きと日本人としての自分について表現することの多くは、故郷の山や川の風景、家族、中学校時代の友だちといったことに関係していることがわかる。そして、その表現は、色彩を伴い、その時の音や匂いまでも彷彿とさせる力を持っている。

- ・「国立公園だらけで風光明媚な鳥取で生まれ、米子の皆生温泉の入口に家を持っており、障子をぱっと開ければ大山がどんと見えて、本当にきれいですよ。」(男性 フランス滞在歴 33年)
- ・「日本について思うことは故郷、中学時代。5, 6年前中学の同窓会の時に、足利に帰ると言ったら、「君ちゃんが帰ってくる」と言っ、大阪、名古屋から30人ぐらいが集まってくれました。…みんな白髪になっているのに、…本当に裸になって、心を開く。中学時代の「君ちゃん、君ちゃん」に、その感覚に戻るのです。」(女性、フランス滞在歴 31年)
- ・「半分外国人みたいになってしまっている私にとって、日本にはいっぱい季節の美味しいものや、きれいな風景があります。文化が違うかもしれませんが。そのすばらしい文化を忘れたくないような、抹殺したくない気がします。」(男性、フランス滞在歴 27年)
- ・「山頭火の句ではありませんが、「年取れば、ふるさと恋し、つくつくぼうし」。やはり40歳の終わりごろからかな。僕は、日本人というよりも、熊本出身の意識の方が強い。結局、熊本には、多くの友達や家族がいるということと、山に囲まれ、琢磨川で18歳まで育っている。」(男性、フランス滞在歴 24年)

このことは、五感を通じた自然体験や、家族、心を素のままに曝け出せる友だちの存在が、いかに人の心の財産として重要であるかを物語るものでもある。

五感を通じて体験したものごとは、記憶されるとともに情緒に働きかける。今回の国立青少年教育振興機構の調査では、このような体験を聞く項目として次のようなものを挙げる。

「海や川で泳いだこと」、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」、「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」、「湧き水や川の水を飲んだこと」、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」、「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」など。

これらの項目に代表される自然体験は、真赤な太陽、きらめく星、川のせせらぎ、冷たい水、草の匂い、鳥の鳴き声など、視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚を通じて、鮮やかに、かつ深く子どもの記憶に刻み込まれるものであろう。加えて、家族や幼き頃からの友人の存在は、DeSeCo が「人生の成功」要因のひとつとして挙げる社会的ネットワークを構成するものであり、人生のセーフティ・ネットでもある。

「何のために子どもには体験が必要なのか」という問いへの答えは、おそらく、このような豊かな生活の質や満足感を伴う、広い意味での「人生の成功」のためということであろう。このことが、体験の力の持つ人生の効用の最も重要な部分といっても過言ではない。

## 2. 体験から獲得されるもの

今回の調査では、このような体験の力の長期的効用とともに、体験で獲得されるものを具体的に調査している。ここでは、(1) 総合的「知」、(2) 心の土台、(3) 家族外のサポート・ネットワークの3つを取り上げてみたい。

### (1) 総合的「知」

「這えば立て立てば歩めの親心」。子どもの成長を願う親の気持ちを表わす言葉である。子どもが自立し社会の一員になることが、子育ての究極の目標であり、親は先々を心配し、世の中で役立つ資質・能力を早め早めに身に就けさせたく思うものである。しかし、多くの親は、学力といったわかりやすい指標で、世の中に役立つ資質・能力を考えがちではないだろうか。

中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」(平成20年2月)では、社会の変化に対応するためには、「狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力および他者との関係を築く力等、豊かな人間性を含む総合的な「知」が必要となる」としている。

これまで学校教育は、答申で言う狭義の知識や技能を中心に、学校システムを通じて人

材を選抜し、社会に配分する機能を有してきた。高い学（校）歴を得ることは、終身雇用制に基づく社会へのパスポートであり、より良い生活を保証するという前提がこれまでの社会には存在した。このような学（校）歴ごとに自動的に職業に到達する分岐的なシステムは、パイプラインに例えられてきたが、山田（2009）は、現在このシステムが制度疲労し、どのパイプからも非正規雇用に漏れる人々がでてきていると指摘する。つまり、努力して学習することで獲得される学（校）歴によって、必ずしも良い仕事や地位が保証されないということなのである。このことは、同じ学歴や資格を保有する人の間でも、正規雇用と非正規雇用の二極分化がすすんでいることを意味する。この二極分化の差は、「総合的な「知」があるかどうかということにあり、世の中では、このような付加価値を持つ資質・能力が必要とされているのである。

答申による「総合的な「知」」として例示されている、「自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、および他者との関係を築く力」といった力は、習得学習や系統学習といった座学よりも、探究学習や総合的学習、あるいは、自然体験や友だちとの自由な遊びから獲得される要素が大きい。

また、多くの仕事がサービス産業である第三次産業で占められる現在、対人関係能力が益々重要になってきているのであるが、今回の調査結果は、それに逆行するように、子どもたちの集団での遊びが減少していることを提示している。つまり、子どもたちにとって、対人関係や社会に出ていく、自然発生的な練習機会が減ってきているということなのである。

そもそも、子どもにとって遊びは、共同性を通じて社会性を獲得するために必須なものである。脳科学者らは、遊びは、子どもが生存や環境適応のための「体験予期型学習」による行動様式の習得練習と考えている（シュッピツアー 2001：61-62/OECD 教育研究革新センター編著 2005:49）。遊びを通じて、ひとは人生のいざというときのためのシミュレーションを行う。複雑で変化が激しい時代であればあるほど、自然体験や遊びは、現実社会で遭遇する事象の対応を広く学習し、シミュレーションするために必要なのである。

自然体験や友だちとの遊びが、概して、学習と相反するように誤って捉えられる場合がある。また、早期教育などの知育偏重やテレビゲームの興隆など、子どもから自然体験や子ども同士の自由な遊びを阻害するような社会的風潮も否定し難い。しかし、体験というものが、広い意味での「知」の形成の礎であることを、今回の調査結果とともに、子育てに奮闘している親に対し、伝えることが重要となろう。

## (2) 心の土台

子どもにとっての自然体験や遊びは、このように、模倣や役割行動を通じて、社会の在り方を学ぶ手段である。同時に今回の調査では、「自然体験」や、ままごと・ヒーロごっこ、すもうやおしくらまんじゅう、といった「友だちとの遊び」の体験量が多いものほど、「自

尊感情」、「意欲・関心」、「共生感」といった「体験の力」があるとの結果がだされている。

つまり、「自然体験」や「友だちとの遊び」の体験が多いものほど、自尊感情が強く、意欲・関心に満ち、共感性に富むということである。このことをあらためて考えてみよう。

「自尊感情」とは、自己評価の感情であるが、生きていく上で、最も根本的な核となる心理的な柱である。自尊感情は、模倣行動、役割行動、指導者の期待といった、教育指導により育成可能とされる（遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編（1992）pp.200-202）。体験の持つ力の大きさは、自然体験を介したひととの関わりや、遊びによる模倣や役割行動により、自尊感情を形成する潜在的な可能性を有することである。

また、「共生感」を育むには、他者の感情を分析する感情認知、他者の考えを予想する役割取得、他者が有する感情を持つ情動の共有といった共感性の獲得過程が必要とされる（Feshbach, N. & Roe, K.1968）。「共生感」は、他者との関わりの中で初めてもたらすものであり、自然体験や友だちとの遊びなくして、「共生感」そのものを高めることはできない。

さらに、「意欲・関心」の高さと自然体験や友だちとの遊びに関しては、ひとは自然や他者との関わりの中で、自分を認識し、また人知を超えた創造物から様々な想像力やインスピレーションを得る。「意欲・関心」の素は、自分と異なる他者や自然界から喚起されるものなのである。

このような「自尊感情」、「意欲・関心」、「共生感」といった心理的基盤は、子どもが生きていくための心の土台であり、総合的な「知」を形成するエネルギー源である。自然体験や友だちとの遊びは、心の土台と言うべき、生きる基礎をつくる作業なのである。

### （3）家族外のサポート・ネットワーク

今回の調査では、家庭でのお手伝いについて、「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」、「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」、「ゴミ袋を出したり、捨てたこと」などを質問している。お手伝いとは、将来自立して暮らしていくために、家庭が提供する OJT（On-the-Job Training）である。子どもが自立し生活するために、お手伝いは親からのスキルの伝授として重要であり、親と子どものコミュニケーションを促進する契機でもある。家族のふれあいとともに、子どもの自立のための働きかけとして、お手伝いの持つ意義を理解することが必要であろう。同時に、子どもには、家族外のネットワークも重要である。

アメリカの歴史学者のクーンツ（1998）は、「過去の歴史の流れの中でうまくいった家庭、うまくいかなかった家庭の様々な形態になんらかのパターンがあるとするならば、子育てというものは両親だけには任せておけない重要な仕事であると考えられている社会において子どもは一番良く育つ。現代のアメリカにおいても、機能的家族と機能不全家族の決定的違いは、家族のかたちではなく、血縁者以外のものも含めて家庭外のサポート・ネットワークの質にかかっているということを明らかにする研究が増えてきている」（クーン

ツ 1998, pp.335-336) と指摘している。

家族以外のおとなと子どもが関わりあうことは、子どもが社会のチャンネルを複数持つことであり、そこからの情報、価値観や経験が、子どもに家族以外の価値観や考え方の広がりをもたらすものである。

子どもに対する家族外のサポート・ネットワークを形成するため、家庭の中でのお手伝いや家族行事とともに、地域や社会教育団体などとのつながりを持つことが、子どもに多くのリソースをもたらすことなのである。

### 3. 自然体験格差の是正に向けて

以上、体験から得られるものについて述べてきたが、残念なことに、今回の調査結果によれば、子どもの知的・情緒的成長にとって重要な体験のうち、自然体験や友だちとの遊びは、年代が若くなるほど減ってきている（表 2 参照）。このことは、将来豊かな生活をもたらす、心の財産とも言えるべき機会が、若い世代ほど少ないことを意味する。

表 2 年代別体験量（成人調査）

ほとんどないと回答した割合(%)					質問項目	何度もあると回答した割合(%)				
60代	50代	40代	30代	20代		20代	30代	40代	50代	60代
17.1	18.9	17.1	19.0	<b>24.3</b>	海や川で貝をとったり、魚を釣ったりしたこと	11.7	13.0	15.9	16.6	<b>18.1</b>
<b>15.4</b>	14.2	11.2	13.1	14.2	海や川で泳いだこと	17.5	16.5	17.8	<b>19.5</b>	18.3
15.5	20.7	21.9	27.1	<b>32.3</b>	太陽が昇るところや沈むところを見たこと	19.5	22.8	25.8	28.1	<b>32.4</b>
13.0	19.3	20.2	26.0	<b>28.3</b>	夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと	16.8	18.4	20.8	26.5	<b>32.7</b>
38.0	44.9	46.8	<b>48.8</b>	44.7	湧き水や川の水を飲んだこと	8.2	8.6	10.3	12.2	<b>14.9</b>
2.9	2.8	3.2	3.9	<b>5.1</b>	かくれんぼや缶けりをしたこと	28.9	30.4	31.8	<b>33.8</b>	29.9
9.4	8.3	4.9	7.5	<b>11.1</b>	ままごとやヒーローごっこをしたこと	12.2	18.0	<b>22.2</b>	21.3	20.5
9.4	8.8	10.3	15.9	<b>20.9</b>	すもうやおしくらまんじゅうをしたこと	13.1	16.8	<b>20.9</b>	21.7	19.8

注 1：ウェブ調査による

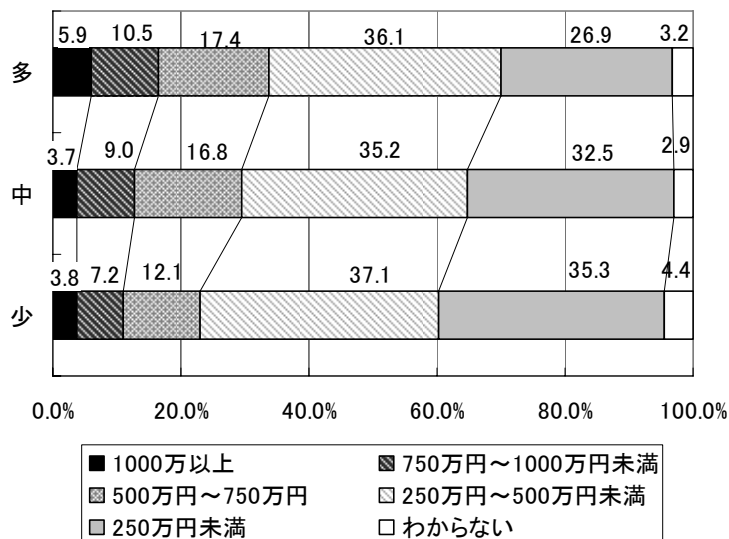
注 2：対象：5,000 人（各年代 1,000 人）

また、今回の調査では、自然体験の量と個人の収入や家庭全体の収入との間の関係が明らかにされている。つまり、自然体験の量が多い者ほど収入が多いという結果である。このことは、自然体験が高収入に結び付くという単純な帰結というよりは、その者が育つ成育家庭、とりわけ親の社会・経済的背景や自然体験に対する意識の高さが、自然体験を媒介して、将来の子どもの収入に結びついているとも考えられる。実際、学習塾などの教育産業が主体となって企画する自然体験活動が、近年数多く行われるようになってきている。



このように、子どもたちの育つ家庭の文化的背景や経済的背景により、「自然体験」や「友だちとの遊び」に対する子どもたちの体験量に格差が生じ、将来の収入や子どもに必要とされる総合的な「知」の形成に影響を及ぼすとすれば、格差を是正し、社会的公平を目指した施策の充実や、平等性を勘案した体験活動の公的提供が一層必要となるであろう。

図1 自然体験の量と年収



注：勤労者のみ

社会は複雑化し、人生の中でそれぞれの個人に課される心理的負荷は益々大きいものとなってきている。これからの時代は、「自尊心」、「意欲・関心」、「共生感」などの心理的基盤の上に総合的な「知」を形成すること、そして、予測不可能な未来に力強く、かつ心豊かに生きることがより強調されるようになっていくであろう。このような社会で生き抜く子どもの育成を目指すには、豊かな自然体験が知育の基礎であり、将来の「人生の成功」のための布石であるといった、子育て観の大転換が求められる。それには、これから子育てを担う親へ、今回のデータに基づいた説得力あるメッセージが発信されることにより、子どもの将来への投資としての体験活動の意義が、多くの親に共有されることが大事なのである。

自然体験や友だちとの遊びの効用を明らかにすることは、人生の豊かさを検討することである。それゆえ、「何のために子どもには体験が必要なのか」を問う今回のような調査研究は、実に先駆的な重要な試みである。その作業は、子どもたちに将来の「人生の成功」をもたらす要素を特定しようとするものであり、その回答には、子どもたちの「人生の成功」に関する秘訣が多く秘められている。このような青少年教育振興機構の量的調査を土台にし、今後は、長期にわたる追跡調査や、インタビュー調査や自伝分析などの質的な調査を併用した、人生全体を視野に入れた自然体験の効用に対する多角的検討が、より一層望まれるところであろう。

【参考・引用文献】

- (1) Feshbach, N. & Roe, K. (1968) “Empathy in Six and Seven Years Old” , *Child Development*, pp.133-145.
- (2) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編 (1992) 『セルフ・エスティームの心理学』 ナカニシヤ出版
- (3) クーンツ S. (岡村ひとみ訳) (1998) 『家族という神話』 筑摩書房
- (4) シュッピツアー M.(村井俊哉・山岸洋訳)(2001) 『脳 回路のなかの精神』 新曜社
- (5) OECD 教育研究革新センター編著(小泉英明監修 小山麻紀訳) (2005) 『脳を育む 学習と教育の科学』 明石書店
- (6) OECD 編著 (御園生純監訳) (2006) 『世界の教育改革 2 OECD 教育政策分析』 明石書店
- (7) ライチェン, D.S. サルガニク, L.H. (立田慶裕監訳) (2006) 『キー・コンピテンシー』 明石書店
- (8) 岩崎久美子編著 (2007) 『在外日本人のナショナル・アイデンティティ』 明石書店
- (9) OECD 教育革新センター編著 (教育テスト研究センター監訳) (2008) 『学習の社会的成果：健康、市民・社会的関与と社会関係資本』 明石書店
- (10) 山田昌弘 (2009) 「希望格差社会と教育、家族」 園山大祐・ジャン＝フランソワ・サブレ編著 『日仏比較 変容する社会と教育』 明石書店